

第3回「国際交流基金の運営に関する諮問委員会」

議事概要(ウェブ版概要)

1. 日 時： 2014年12月12日(金) 10時～12時

2. 場 所： 国際交流基金本部会議室「富士」

3. 出席者：

〔委員〕 ※五十音順

五百旗頭真座長、川島真委員、迫田久美子委員、千野境子委員、永井多恵子委員、細谷雄一委員、水沢勉委員、宮本亜門委員、渡辺靖委員

〔国際交流基金〕

安藤理事長、櫻井理事、田口理事、亀岡上級審議役、沖部上級審議役、柄統括役兼企画部長

4. 議事：

日本の文化外交のあり方-東京五輪に向けた文化事業という観点を含む

5. 議事概要：

五百旗頭座長の進行で、「日本の文化外交のあり方-東京五輪に向けた文化事業という観点を含む」という議事にそって自由討論を行った。概要は以下のとおり。

<パブリック・ディプロマシー関連>

- ◆ 国際交流基金(以下、「基金」)は、アートや文化を通して、もう少し政治的な波及効果を狙う戦略的な事業を考えることも必要。
- ◆ 対外広報を強化し、日本を対外発信する際に重要であるのは、現地社会において日本の情報を発信する方々。そういった人への日本研究支援を、対外広報として位置づけ直し、批判も含め、内容が事実であれば受け入れるといった柔軟な対応が必要。
- ◆ 世界で注目されているのは、高齢化社会に直面していたり課題先進国といわれたりする、日本のありのままの姿。どういう選択肢があり、どういう理由でそれを選び、その経過や結果を発信することに、かなりの付加価値がある。日本自身が持っている先端性を見直し、日本の日常的な課題を発信していくことが重要。
- ◆ 海外の日本研究者たちが発信する内容を真摯に受け止め、我々が気付かないことに気付いているということを、彼らにフィードバックする姿勢が大切。
- ◆ パブリック・ディプロマシーや文化外交について、これからは垣根を越えた、外務省と国際交流基金、官と民といった協力がさらに必要。いかに外注するかも重要。
- ◆ 知日家・親日家の狭いネットワークから、これからはより広いネットワークを作り、政府がストラテジック・コミュニケーションをしていくことが必要。
- ◆ 日本に対するステレオタイプの間違いは起こりやすく、それを正すことが大事だが、

日本のここを打ち出すというような、ポジティブな方に軸を置くことが非常に大事。

- ◆ 海外で日本のことを発信する発信源、人材などを増やし、招請したり、研究を任せたりすることが大事。日本年をテーマとして設けてもらうように働きかける。世界で東アジア・アジアに注目が集まっているので、アジアに重点を置く。
- ◆ 「憧れの国、ニッポン」という一つの戦略がある。世界各地で日本文化が認められており、日本人自身が知らない日本の魅力もあるので、世界の声を聞くことも重要。
- ◆ 日本語教育の全体の雰囲気、危機感に襲われている国と高揚感に満ちている国があると感じた。危機感に襲われているのは韓国。高揚感に沸いているのは東南アジア。こういう現状を我々は直視するべき。
- ◆ 海外では日本語教育と日本研究が一つになっていることが多い。海外の求めていることを吸い上げ、「グローバル・ネットワーク」を活用し、日本語教育に携わる者と日本研究者の連携や、高等教育だけでなく中等教育に携わる若い人材の活用ができないか。

<2020年の東京五輪に向けた文化事業関連>

- ◆ 基金として、2020年の東京五輪に向けて、どういう日本を見せていくか、どう見られたいか、どう理解されたいか、といったイメージを最初に作って事業を開催することが重要。
- ◆ アール・ブリュット、障害者アートについて、一部の地方ではかなり行われている。パラリンピックは東京五輪が最初だったと記憶しており、こうした活動を通して日本が障害者に目を配り、住みよい社会を築いていくことにつながり、またそのことをアピールできる。
- ◆ 文化振興を強化する。東北の復興都市で、文化的・経済的に非常に良くなった事象を提示するのは非常に大事。そこでの大きなお金と時間をかけたイベントをやるべき。海外から注目されるのは、東北復興都市。
- ◆ 東京五輪では、東京が未来的でセンスがよく、洗練されている、とみられるように演出すべき。中心になるのは20代、30代、40代の若い人。まずは日本に関心を持ち、面白そうだと思ってもらえる入口のパッケージが重要。
- ◆ 2020年に向けて、客観的に信頼性の高い情報を集積・蓄積して、国内外に発信できるよう、アーカイブとしての結節点が必要。アーカイブ的な情報の集約点としての求心性や、ポータルサイトのな力を基金が持ち、そこを探れば海外とつながっている、といった開かれた試みが必要。
- ◆ 東京五輪の文化事業では、「日本をどう見せて、どう感動を広げるか」とアピールした方が世界に影響力が強い。自分たちが世界に何を発信していくのかという思想が必須。
- ◆ 東京五輪では、世界をリードしていくようなキャッチフレーズと、その元となるコンセプトを作成。
- ◆ 東京五輪で文化事業を活発に実施するのは、長期的観点が必要。日本と海外の文化が切磋琢磨する場としての、ロンドンがやっているような役割を日本が果たすことや、枠をはめないで日本を発信することが大切。

以上